

氏名	やまぐちなりこ 山口周子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第442号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	ラリタヴィスタラ (<i>Lalitavistara</i>) とその「モンゴル語抄本」(<i>Burqan-u arban qoyar jokiyang yui</i> ‘仏の12の行い’) の研究
論文調査委員	(主査) 教授 徳永宗雄 教授 赤松明彦 准教授 横地優子

論文内容の要旨

本論は、『仏の12の行い』(『ブルハニ・アルバンホヤル・ジョヒヤングイ』*Burqan-u arban qoyar jokiyang yui* 以下BJ) 成立の背景を考察するものである。この書は、チューキ・ウーセルによって記されたチベット語テキストを、サキャ派の僧侶シェーラブ・センゲが、元朝期にモンゴル語訳したものである。現存するのは第6章から9章までの範囲のみであり、この部分は、本来あった3巻本の内の中巻と推測されている。チベット語の原典テキストについては、存在が伝えられるものの、実際にはその存在は確認されていない。

本論ではまず序章において、従来の研究史がまとめられている。最初に本書BJを扱ったのは、ポッペ (Nicholas Poppe) であった。彼は、1967年に発表した *The Twelve Deeds of Buddha, — A Mongolian version of the Lalitavistara. Mongolian text, notes, and English translation —*, Wiesbaden において、BJの第6章から第9章のテキストの転写とその翻訳、テキストの写真を示している。彼の主張するところによれば、BJは「ラリタヴィスタラ (以下LV) の抄本 (abbreviated version)」であり、BJ第6章から第9章は、LV第13章から第21章に相当するとされている。その根拠として彼は、BJとLVの物語構成の類似を挙げた。また、LVのモンゴル語訳 (以下LVm) にBJと一致する偈頌が見られることから、後に成立したLVmへの、BJの影響を推測している。

この研究で示された、「BJはLVに基づいている」というポッペの見解は、論者も大筋では正しいと考える。しかしながら、この説は、残念なことにテキストを綿密に比較検討した結果なされたものではなかった。LVについての理解もフランス語訳によったものであり、さらにBJが実際に基づいていたであろうLVのチベット語訳テキスト (以下LVt) には全く注意を払っていないのである。またLVmの成立についても、そのコロフォンに基づいて17世紀前半としているが、これも実証的な検討を行った上での結論ではなかった。

次にBJを扱ったのは、リゲティ (Louis Ligeti) であった。彼は、1974年に *Les douze actes du Bouddha*, Budapest を発表した。テキスト校訂を中心とした研究で、ポッペによって発表されたテキスト転写を、より正確なものに改訂したものである。さらに彼は、1984年に、論文 *La version mongole des douze actes du Bouddha, Tibetan and Buddhist Studies*, vol. 2, pp. 7-76 を発表して、BJとLV (LVt, LVm) の関係について、ポッペの説の再検討を行った。ここでリゲティは、『ブトン仏教史』の仏伝や、チベット語の律文献等を含む複数の仏伝テキスト、仏の生涯を12項目に分類するチベットの所伝にも関心を示している。しかしながら、そこではそれら諸資料の記述とBJを厳密には比較しないままに終わっており、BJとLVtとの共通性を強調する方向で一方的な論を展開するのみである。偈頌をめぐっても、BJとLVm両者間に共通するもののみを取り上げ、BJからLVmへの影響を示唆したのであった。彼は、結論として、BJはLVtを簡略化したテキストであろうとの見解を示した。

さらに、庄垣内正弘教授は、2003年に発表した *Uighur influence on Indian words in Mongolian Buddhist texts, Indien und Zentralasien*, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Band 61, pp. 119-143 において、元朝期翻訳のモンゴ

ル仏典に見られる古ウイグル語の影響という観点から、BJを扱っている。この論文で、庄垣内教授は、古ウイグル語におけるサンスクリット借用語彙の音韻的特徴を紹介し、BJに見られるサンスクリット借用語にも同様の語形が確認されることを指摘した。そしてそこで示された方法論が、論者にとっては、ポッペやリゲティが提示したLVmとBJの関連、および、LVmの成立時期を問いただすのに有効なものであると考えられたのである。

以上の先行研究のうち、特に、ポッペとリゲティのものは、LVt以外のテキストの影響の可能性について、十分な配慮を示さず、BJの基盤としてLVtのみを想定しているが、これは甚だ不適切と言わざるを得ない。なぜなら、BJにはLVtに帰すことのできないいくつかの要素が見られるからである。本論では、それらの要素について詳細に検討を行った。また、モンゴル語以外のテキストについて、かれらはそれらをほとんど使用していないのであるが、本論ではそれらを積極的に活用して、新たな研究方法を示し得たと信ずるものである。

以下、本論の章立てに従って、要旨を述べる。

第1章： 他の仏伝にはみられないモチーフが認められるLVt第13章（「勸発品」）と、それに類似する内容をもつBJ第6章（「僧となって出家する章」）前半部分の内容的構成、および偈頌に着目した。LVt第13章は、ほぼ全編が偈頌で記されており、「勸発（菩薩に出離を促す言葉）」、「六波羅蜜の徳目を内容とする本生譚」、「空性の譬え」、「浄居天天子の登場による勸発」の順で構成されている。BJ第6章前半の内容は、ほぼこれに一致しているが、LVtの記述をそのまま引用したものではない。LVtには見られない本生譚についても言及しており、明確な不一致が確認される。この章において導かれた結論は、BJは、概ねLVtに依るものとみなせるが、LVt以外のテキストにも影響されている可能性が否定できないということである。

第2章： BJには、仏伝では重要役割を担う人物についても、LVtに一致しない要素がいくつかある。即ち、1）菩薩の妻として、ヤショーダラー妃が登場する、2）菩薩の息子としてラーフラの存在が語られる、3）菩薩の供養者として、ナンダーとナンダバラが見られる、この3点である。その他、4）菩薩の妻がみた夢の内容、5）息子ラーフラの入胎の時期、6）菩薩の愛馬カクタカの心痛による頓死と転生、7）菩薩の成道を妨げる死魔を退ける大地の女神の名前が異なる、といった点も、両テキストの不一致点として挙げるができるだろう。

そこで、リゲティが言及していた仏伝テキストと、漢訳の仏伝テキストを対象とし、上記7項目について、BJとの比較検討を行った。その結果、チベット語の律文献の仏伝には、最も多くの一致が見られた。まず、1）から5）の項目に関しては完全に一致していた。6）の項目については、カクタカの転生先が異なるものの、頓死するという点では一致した。7）に関しては一致が見られなかったが、少なくとも、チベット語の律文献をはじめとする、（根本）有部系統の仏伝の影響がある可能性は考慮されるべきであることが、以上の分析からわかった。

第3章： 従来の研究では、LVmの成立を17世紀とした上で、BJとLVmに類似する偈頌が存在することから、元朝期成立のBJからLVmへの影響が想定されてきた。しかし、その根拠は、有力なものとはいえない。金岡秀友は、1957年に発表した論文「蒙古文大蔵経の成立過程—附・東洋文庫蔵蒙古文カンヂェル略目録—」、『佛教史学』第6巻第1号、pp. 41-48で、LVmを含むモンゴル大蔵経は、元朝期に成立していたと主張しているが、これはチベットの仏教史書に依拠した説であり、実際のテキストを検証した結果ではない。現在に至るまで、「元朝期成立のモンゴル大蔵経」の実物は発見されていない。そこで、本稿は、庄垣内教授の上記の論文に示された方法論を応用し、現存の清朝期印行のLVm中に、元朝期モンゴル仏典翻訳の特徴が見出されるか否かを調べることにした。元朝期翻訳のモンゴル仏典には、古ウイグル語に基づいてサンスクリット語に還元された語彙（以下「還梵語彙」と称する）が頻出する。

まず、多くの人物や神格名称の連続、或いは近い位置での頻出が目立って確認される、第13章と第21章に着目し、LV、LVt、LVmの各テキストを詳細に比較対照した。その結果、LVmにはLVtの意識もあるが、かなりの比率で古ウイグル式還梵語彙が使用されていることが、確認できた。また、その数は、BJよりもはるかに多かった。次に、第14章から第20章までの古ウイグル式還梵語彙についても調べた。この範囲には、古ウイグル式還梵語彙が連続するような箇所は見られなかったが、天体や植物、鉱物名称や、抽象名詞の翻訳に、古ウイグル式還梵語形が使用されていることが分かった。

一方、清朝期にモンゴル語を加えて編纂された仏教用語辞典、『翻訳名義大集』（*Mahāvīyutpatti* 以下Mvpt）も比較対象として取り入れ、清朝期印行時の改訂の可能性についても考察したが、Mvptに一致する語彙は少なかった。

以上の結論として得られた事実は、LVmには元朝期の特徴を有する語彙が相当量存在し、成立が元朝期にまで遡り得ると考えられるということである。したがって、LVmの翻訳作業にBJが影響を与えた可能性は低いと言わなければならない。このことだけから、金岡の説を支持することは早急ではあろうが、モンゴル大蔵経中に、元朝期に遡り得るテキストが存在することは、否定できないのではないかと考える。

結語： 本稿は、LVtの特徴である第13章の偈頌、LVtには見られない登場人物やモチーフ、古ウイグル語形式還梵語彙という、3つの観点から、「BJはLVtの抄本のモンゴル語訳であり、LVmに影響を与えている」という従来の見解について、再検討を試みたものである。その結果、BJにはLVt以外の仏伝の影響がうかがわれ、LVtの完全な抄本のモンゴル語訳とはいえないこと、またBJとLVmの関係については、LVmの成立はBJより遅いという前提が立証されることが明らかとなった。

最後に、今後の課題を述べておきたい。BJの題名が「仏の12の行い」である点に着目して付言するならば、仏の生涯を12項目に分類するチベットの所伝は、その起源もいまだ明確にはされておらず、分類の項目にも異説があるが、その中にはBJの章立てと一致するものがある。これを考察の基礎とするなら、BJはいくつかある「仏の12の行い」のうちの一つのパターンに基づいた仏伝であり、物語の素材として、LVtや（根本）有部系の仏伝の要素が擧用されたと想定できる。このことから、BJとLVtの関係のみを重視して来た従来の見解は、着眼点および研究方法ともに、不適切であったといわざるを得ないだろう。多々ある「仏の12の行い」のモチーフについては、その系統や起源に関する詳細はなお不明であって、今後の課題としなければならない。

論文審査の結果の要旨

申請者の山口周子さんはモンゴル仏教文献を扱える数少ない研究者の一人であり、本論文では、モンゴル語の知識を駆使して、モンゴルに伝わる仏伝文学『仏の12の行い』（『ブルハニ・アルバンホヤル・ジョヒヤンガイ』*Burqan-u arban qoyar jokiyang yui*）の成立の経緯を考察している。

『仏の12の行い』は仏伝文学の一種であり、仏陀の生涯を、天界降下から涅槃、遺骨の分配に至る12の事跡に分けて描いている。本書は、元朝期に活躍したと見られるチューキ・ウーセルが著したチベット語テキストを、サキャ派の僧侶シェーラブ・センゲがモンゴル語に翻訳したものである。原本のチベット語テキストは散逸しており、『仏の12の行い』も第6章－第9章だけが残っている。

本書については、ポッペ（Nicholas Poppe）とリゲティ（Louis Ligeti）の先行研究がある。ポッペは、長大な仏伝文学『ラリタヴィスタラ』と本書の物語構成が類似することから、本書は『ラリタヴィスタラ』の抄本であり、現存する第6章から第9章は『ラリタヴィスタラ』の第13章から第21章に相当すると推測する。しかし、彼は比較に際して『ラリタヴィスタラ』の仏訳を使っており、サンスクリット原典もチベット語訳も参照していない。

ポッペの研究手法に疑問を感じた論者は、本論文で、サンスクリット、チベット語、漢語の一次資料を駆使して本書の内容を綿密に検討し、本書を『ラリタヴィスタラ』の抄本と見るポッペの説を批判する。また、ポッペは、本書と類似する偈頌がモンゴル語『ラリタヴィスタラ』に見られることから、本書が後者の編纂に影響を与えたと考えるが、この点についても論者は異なる見解を提示する。

リゲティは、『プトン仏教史』やチベット語律文献等の仏伝資料にも関心を示しており、その点でポッペより一歩進んでいるが、テキストの詳細な比較を行うことなく、『仏の12の行い』を『ラリタヴィスタラ』の抄本と見るポッペの説に概ね従っている。また、『仏の12の行い』とモンゴル語『ラリタヴィスタラ』の関係についても、ポッペより詳しい文献比較を行いながら、彼の説を再考するには至っていない。

本論文は三章から成っている。第1章では『仏の12の行い』の偈頌をサンスクリット原典『ラリタヴィスタラ』とそのチベット訳に見られる偈頌を比較し、前者にあって後者にない要素を抽出しつつ、本書が『ラリタヴィスタラ』以外の文献とも関係があることを明らかにする。第2章では、これらの要素の出処を『ラリタヴィスタラ』以外の諸文献に探り、『ラリタヴィスタラ』にない『仏の12の行い』の要素の多くが『根本説一切有部律』の仏伝に見られ、かつまた、『有部律』にない要素も同時に存在することから、本書が『ラリタヴィスタラ』の抄本ではなく、『ラリタヴィスタラ』や『根本説一切有

部律』等の複数の文献をもとに独自に編纂された仏伝文学であると結論する。

第3章では、『仏の12の行い』とモンゴル大蔵經に含まれる『ラリタヴィスタラ』の影響関係に関するポッペトリゲティの説を検討する。ポッペトリゲティは、モンゴル大蔵經とそこに含まれるモンゴル語『ラリタヴィスタラ』が17世紀に成立したとの前提に立ち、元朝期に成立した『仏の12の行い』がモンゴル語『ラリタヴィスタラ』に影響を与えたと考えるが、論者は、モンゴル語『ラリタヴィスタラ』に見られる古ウイグル系サンスクリット語彙に注目し、同文献中の神格、天体、植物、鉱物等の固有名詞を精査し、そこに古ウイグル系サンスクリット語彙が多く含まれていることを発見した。このことは、モンゴル語『ラリタヴィスタラ』が元朝期に遡る可能性を示唆するものであり、極めて興味深い。しかも、モンゴル語『ラリタヴィスタラ』に含まれる古ウイグル系サンスクリット語彙は、『仏の12の行い』のそれを数の上で遙かに凌駕している。これらの点から、論者は本書がモンゴル語『ラリタヴィスタラ』に影響を与えたかどうかという設問自体、余り意味をもたないとする。

本論文は、『仏の12の行い』が『ラリタヴィスタラ』の抄本ではなく、複数の仏伝資料をもとに独自の作品として編纂された可能性を初めて示したものとして、高く評価される。欲をいえば、先行研究の見解を否定するだけでなく、論を更に進め、新たな仏伝文学として本書が編纂された事情の究明が望まれるところであるが、そのためには、仏陀の生涯を12の事跡にまとめて描く仏伝文学の系譜を、チベット、インドに遡って確かめなければならない。これはまた一つの論文になるべき大きなテーマであり、論者の今後の研究に俟つべきものと思われる。

最後に、本論文の研究成果の副産物として、モンゴル大蔵經の成立時期に関する論者の問題提起に触れておきたい。一般に、モンゴル大蔵經は清朝期に編纂されたと見られているが、一部には元朝期成立を主張する研究者もいる。モンゴル語『ラリタヴィスタラ』に見られる古ウイグル系サンスクリット語彙をもってモンゴル大蔵經全体を論じることはできないが、モンゴル大蔵經が元朝期に遡り得るテキストを含むことは、この大蔵經が長期に亘る複雑な編纂プロセスを経て成立した可能性を示唆するものであり、注目に値する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2008年1月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。